津田梅子の生き方（1）
～女性は、生まれたときから差別されていた～

梅子は、佐倉（現・千葉県）藩の藩士であった父・仙と母・初子の次女として、幕末の 1864(元治元)12 月 31 日、江戸の牛込にある、南御徒町と呼ばれていたあたり（現在の東京都新宿区）にあった津田家の屋敷で生まれました。

父・仙と梅子
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子が誕生した時、生まれた子が女の子だと知った父・仙は、がっかりして仏頂面で家をとびだして行ってしまったといいます。梅子の父・仙は、当時としては相当に西洋言語と文明に精通した人物で、幕府の外国奉行の通訳として勤めていました。妻、初子の間に初めて生まれたのも女の子でした。名前は琴子といい、梅子が生まれた頃には 2 歳になっていました。江戸時代には、男がその家の財産や仕事を引き継ぐのが当たり前であり、妻となる女性は男の子を産んで初めてその家で認められる、という考えが色濃く残っていました。仙の落胆は、女性の立場がいかに弱かったのかを端的に示しています。すなわち、梅子だけでなく、その頃の女性たちは、みんな生まれた時から差別されていたのです。

生まれて 7 日目、お七夜の祝いを過ぎても、仙は生まれた子どもに名前をつけようともしませんでした。

そんな仙の様子に呆れてしまった妻・初子は、赤ん坊の枕元にある盆栽の梅（むめ）の花が 2 輪・3 輪とほころび始めているのに目をやると、その子を「梅（むめ）」と名づけました（※なお、明治 35（1902)年に梅子（うめこ）と改名）。

父・津田仙は、下総国（現在の千葉県北部と茨城南西部と埼玉県東部など）佐倉藩士を務める小島家の三男として生まれました。アメリカ東インド艦隊の司令官ペリーが黒船を率いて来航したのは、仙が多感な 10 代の頃でした。

このペリー来航が、当時の日本の青少年に与えた影響は計り知れません。藩主の堀田正睦が西洋文明に大変興味を示す人物だったこともあり、仙は、蘭学、英学を学んで通訳となりました。そして徳川御三卿のひとつ「田安徳川家」の家臣の津田家の婿となると、姓が「津田」に変わります。

1866（慶應 2）年 10 月、幕府は購入契約をしていた軍艦の催促、大砲・小銃の輸入、製鉄関係書籍の購入等を目的とした使節団の欧米派遣を決めると、使節団代表・小野友五郎の随員として、仙もこの一員に加わることになりました。堪能な語学を買われてのことでした。梅子が数えで 4 歳になったばかりの慶応 3（1867)年1月、仙はアメリカに旅立ちます。随員の中には、あの福沢諭吉も含まれていました。

そしておよそ半年後、役目を終えて帰国した仙は、アメリカから一冊の本を持ち帰ります。その本は、ヘンリー・ハーツホンというアメリカ人医師が書いた最新の医学書でした。なんと仙は、この難解な本を 4 歳の梅子に見せていました。仙は、梅子の後に跡取り息子ができたことで、生まれた時の冷たい態度が信じられないくらいに梅子を可愛がるようになっていました。